

日本からタイ・チェンマイへの国際引退移動

International retirement migration from Japan to Chiang Mai, Thailand

中川聡史 (埼玉大学)・丹羽孝仁 (帝京大学)

Satoshi NAKAGAWA, Takahito NIWA

snakagawa@mail.saitama-u.ac.jp

国際引退移動 (International Retirement Migration) は近年、とくに欧米で注目されている研究分野である (King *et.al.* 2000: Oliver 2012)。日本人の国際引退移動に関しては久保・石川 (2004) 以降、研究が重ねられている。しかし、石川 (2016) が指摘するように、国内退職移動を含めて、日本の退職移動研究は研究の蓄積という点で欧米との差が大きい状況にある。日本からの国際引退移動については、小野 (2007,2010,2012)、稗田他 (2012) がマレーシアへ、河原 (2010)、Fielding (2016) がタイへ、長友 (2013) がオーストラリアへ、篠崎 (2007) がニュージーランドへの移動について論じている。これらの研究では国際退職移動を「ロングステイ」(小野 2012)、Lifestyle Migration (長友 2015) のなかに位置づけ、相対的に豊かで、選択肢のある人々が老後を海外で過ごすことを選択するという文脈で日本の国際引退移動を述べている。また、近年は海外で暮らす日本人高齢者の医療や介護に注目が集まっている (小野 2010、2012: 真野 2012)。ただ、Hall and Hardill (2016) が指摘するように、目的国での医療・介護サービスが不十分であることなどを理由に帰国する人も多い。

タイのチェンマイは日本人の国際退職移動の重要な目的地の一つで、チェンマイ市を含むチェンマイ領事館管轄地域の邦人数 3,843 人のうち 1,780 人が 60 歳以上 (海外在留邦人調査統計 2014 年 10 月時点) である。在留届を出さずに、とくに冬季の数週間~数か月滞在する人も多く、実際の数については把握が困難であるが、チェンマイには日本人ロングステイヤーの団体があり、河原 (2010) はこうした団体のメンバーを調査対象としている。しかく、最大の団体の規模が約 150 人であり、団体に所属していない日本人のほうがはるかに多い。ロングステイの団体を通じた調査をおこなうと、豊かな高齢者像が浮かび上がることが多いが、退職移動によってチェンマイで暮らす日本人のなかには必ずしも豊かな高齢者ばかりではない。

報告者らは 2010 年以降、日本人退職者に対するアンケートを主に街頭でおこなった (2010~2011 年 216 人、2015~2016 年 161 人で計 377 人)。街頭で実施したのはロングステイ団体に属さない人、数週間~数か月の短期滞在者 (多くは毎年、それを繰り返す) も調査対象となるように意図したからである。調査の結果、チェンマイの日本人退職者は、①同世代のなかでは高学歴者の割合が高いものの、かならずしも豊かではない、②チェンマイ特有の要因からか、男性単身者の割合が高い、③約 5 年間の変化をみると、定住者 (通年で滞在) の割合が低下し、短期滞在者の割合が上昇した、④当初は永住予定と答えていても、健康上の問題から帰国した人がいること、などの特徴をもつことがわかった。定住者については新規に来る数よりも帰国あるいは第 3 国に行く数のほうが多いと推計される一方、短期滞在者数は増加していると考えられる。その要因としては定住者の高齢化、経済発展によるタイの物価上昇、為替レートの変動による円の価値の低下などが挙げられる。